

自由の声

20,000冊の本が南アへ

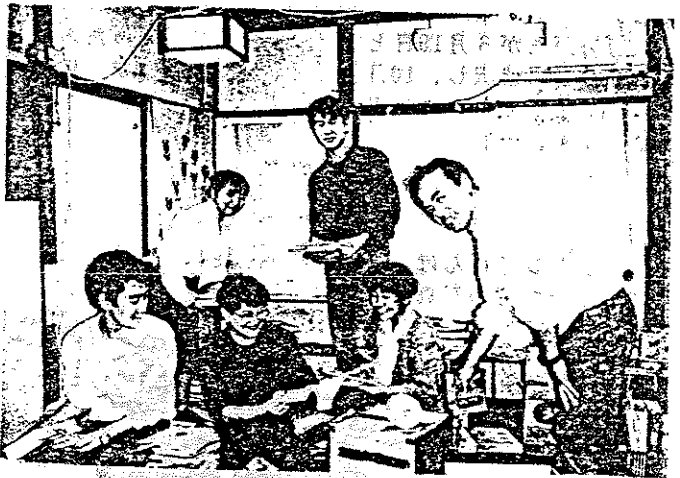
お礼とご報告

昨年の秋から南アフリカの民主化と平等化の一助にと、送り始めた英語の本が今秋ですでに20,000冊になりました。現在、送付してから2ヵ月以上たつものは、無事に南アの各地の送付先に到着しています。そして各送付先からは、忙しい活動の中から、お礼と当地の状況を知らせる手紙が届いています。

ありがたい送料費の寄付

これはすべて全国から、本と送料についてのご支援をいただいたおかげによるものです。本当にありがとうございました。

今夏、集まった本に対して送料が不足し、滞ってしまいましたが、私たちの訴えに対して、これまでの支援者の方と、新たに朝日新聞家庭欄(9/14)を見て応援して下さい下さった方々のおかげで、手元にある本についてすべて、送るだけの送料が集まり、現在、送付中です。暮れまでには、さらにこちらへの送付を保留していただいている分まで、受け取って南アへ送付することができそうです。しかし、南アでは私たちの力量に対して、無限といってもいいほどの人々が本を必要としています。私たちは必要とされる限り本送付を続けていきますので、今後ともご支援を続けて下さるよう、お願いいたします。

作業について

昨年の春、3人から始めて、じきに5人、そして8人と増えて、今ボランティアを申し出て下さっている方が20人を越えています。仕事の関係で日・祝日などを使い、集まれる人が野田の家で、作業を行います。

私たちの夢

1500人の学校に条件の良いほうでも一つの本棚の3分の1ぐらいしか本がない。家庭にも本がない、という状況の中で、今とはとにかく現地の市民グループがたずさわっている数10校といくつかの識字の講習会に送っていますが、来年は村の図書館や移動図書館(ダーバンで試み始めている)にも力を入れていきたいと思っています。

南アのベノニからの手紙 “もっともっと本が欲しい”

ベノニ市はヨハネスブルグの東方30キロにある大きな都会です。ベノニは白人地区と黒人地区に別れていて、下水、電気、道路などの設備から学校教育まで大きな隔たりがあります。白人と黒人が共に活動しているベノニのNGOイーストランド教育協会からの手紙をご紹介します。

1993年8月31日

「……私たちは土曜日にデヴェイトン(黒人居住区)のすべての学校を招いて会議を開きました。私たちは6月までに日本から届いた約4000の本を各校に一箱ずつ、パッキングしておきました。会議に出席した各学校に本を配り、本の使い方について協議しました。16の学校からの代表が出席しましたが、全員大喜びで受け取り、それらの本を使うことについて非常に楽しみにしていました。

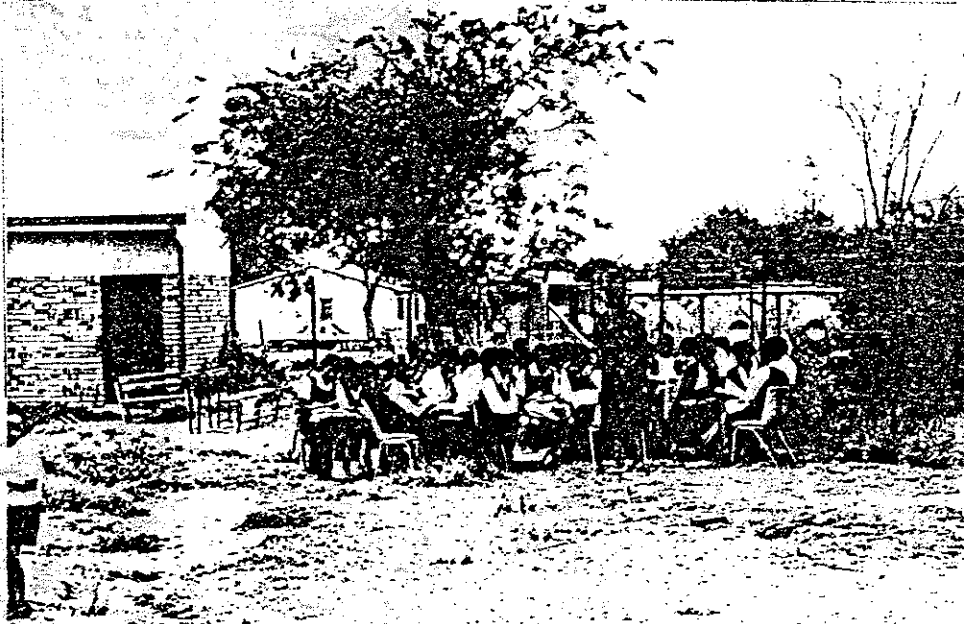
残りの本については、欠席した学校のために、次回の校長会議の時まで保管しておきます。出席しなかった学校は、本当に本があるのだろうかと思わしく思ったようですが、話がすぐ広がって本当のことを知ったなら、かならずや狂喜すること、間違いありません。

またヨハネスブルグの北の黒人居住区であるアレクサンドラで活動している教会のグループとも連絡をとり、次の荷物の一部は、アレクサンドラの学校に配布するつもりでいます。こんなふうに、本はもっともっと恵まれることの少ない子供たちのところに広がっていきます。……」

貴方がたが6月19日と26日に発送して下さった本は8月17日に受け取りました。これは9月7日に仕訳し、10月16日に学校に配ります。皆さんが南アフリカの子供たちのためにして下さっているお仕事に対して、もう一度、心から深い感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。……」

デイブ・ベントレイ
イーストランド教育協会会長

ベントレイさんは、手紙といっしょに、黒人の学校や先生たちの会議の様子や本を渡している所などの写真をたくさん送って下さいました。



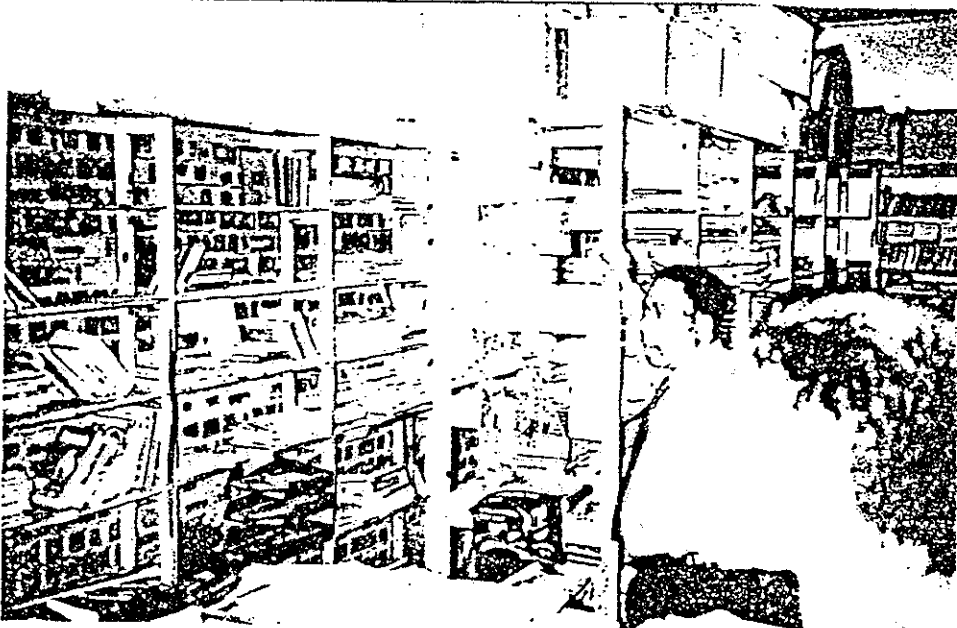
ぎっしり詰まった窮屈な教室より机がなくても外の方がいい。(デイトン)



黒板の前までぎっしり、過密な教室。(デイトン)



異人学校の教師が集まって、送られてきた本の使い方、
分け方を話し合う。(ペノニ)



図書室のある学校自体が少ない。1500人の学校の図書室。ほとんど本がない。(デイトン)

南アフリカ帰国報告会

日本国際ボランティアセンター(JVC)南ア駐在員 高梨 直樹氏

去る6月6日埼玉県労働会館で、南アヨハネスブルグから一時帰国した高梨さんに南アの状況を話してもらいました。JVCが援助しているイシナンバ地域開発センターには、高梨さんと連絡をとりながら、「アジア・アフリカと共に歩む会」からも識字活動や学校に本を送っています。高梨さんの話の中から一部をご紹介します。

日本国際ボランティアセンター(JVC)は1980年のタイ・カンボジア国境での難民救援活動をかわきりに、ベトナムやラオス、ソマリア、エチオピアの地域で農業、医療、植林、技術訓練などのプロジェクトを展開している団体です。……

南アでの活動は昨年(1992年)私が赴任するところから始まります。現在でも南アの最大の問題はアパルトヘイトの影響であると言えます。……

……今までアパルトヘイトによって利益を得てきた一部の保守的な白人たちの中には新憲法を作る交渉の過程を妨害するために暴力事件を起こすものもあり、それによって年間約3000人が殺されています。その犠牲者は政治家や活動家だけでなく、一般の黒人たちにも及んでいます。……

またこれまで一方的に黒人が犠牲者であったわけですが、黒人の急進派の人々が反撃に出るといふかたちで、白人のゴルフクラブやレストランを襲うという事件がここに来て頻発していることから、白人社会を恐怖に陥れているという状態です。……

もう一つの問題は黒人の50%にもものぼる失業の問題と低賃金を強られる黒人の経済的基盤の弱さです。そのため黒人の精神状態が悪くなり、殺人や強盗、強姦などの犯罪が多発しています。

こうした暴力事件は地域の一般の人々を巻き込んだ暴力事件となっているので、いろいろなプロジェクトをやっていく上で影響がでてきてはいますが、今、南アでは人権問題、教育、環境、農業、社会福祉、医療保健などの様々な分野で現地の市民団体が自ら立ち上がり、自分たちの手でやろうという動きがあります。JVCはそのような黒人が主体となっている自治組織、市民団体に対して援助活動をしています。

JVCの支援団体

(1) ジェフスビル(ジェフの村) 4000戸帯 18400人

都市の黒人居住区の住宅不足のため、一年半前に空き地で建てられた黒人のスラム。不法居住であることから何度も壊されたり、いやがらせを受けたりした。JVCはここに保育園の建設やトイレ作り、水道をひくなどの援助を行なっている。

保育園の保母さんは全てジェフスビルの住民。住民自治で住民たちから少しずつ集めたお金によって水道を引いたり、ゴミの収集をしたり、パトロールなどを行っている。今後新たに住宅を作ることと職業訓練所をつくることを目標にしている。

(2) トランスカイ(農村) 1975年製 イシナンバ地域開発センター

農村の男たちは金やダイヤモンドの鉱山労働者として駆りだされるため、家族は解体し、ホームランド(アパルトヘイト時代に定められた黒人居住区)には、なんら生産能力を持たない女や子ども、年寄が残されることになる。

そこでノクゾラ・マギダを中心に精神的、経済的な女性の自立を図ろうとする活動が行なわれている。センターの活動は3段階に分けられる。

第一段階 —— 開発を精神的解放と捉える。

1. 自分たちがどのような状況に置かれているのか。
2. なぜ、そうした生活を強いられるのか。
3. 自分たちはどのような可能性をもっていて、どうすればそうした状況を乗り越えていけるのか。

について話し合いを重ねていくのと共に実際に、ミシンかけ、編み物、パン焼きなどの技術訓練することによって、自分で物を作り出せるという自信をもつことができる。

第2段階

村々で10~15人からなる小さな共同組合を作り、センター内で学んだ技術をもとにそれぞれ野菜作りやパン焼き、裁縫などの共同組合を自分たちで始められるようになる。

第3段階

インナンバから完全に独立して自分たちで金融機関からお金を借りて運営できるようになる。

JVCは第3段階を目標に今女性たちを指導しているところです。また、インナンバのセンターを超えた広い範囲での人間性回復の運動を、より多くの人を巻き込んだ文化復興運動としてくりひろげていきたいと望んでいます。

南アフリカ共和国の教育事情

南ア黒人教育を支える会

河地 和子

南ア教育制度の現況

1. 1991年、アパルトヘイト根幹法が廃止されたことにより、法的には黒人であるという理由で入学できない学校はないことになっている。
2. しかし、圧倒的多数数の子どもは人種別の学校へいっている。人種混合の学校へいっている子どもは大会にほんのわずかいる。(居住地が人種別に区分されたままで、未だモービリティはない。)
3. 人種別でなく、あらゆる国民に一本化した教育を施そうとしているが、今のところは未だ過渡期にあり、文部省も人種別に存在しているありさまである。

黒人教育の問題点

1. 従来、白人は無償で高校まで義務教育であったが、黒人には有償(授業料、教科書代金、制服、学校施設費など)で、教育義務ではなかった。
2. 黒人の子どもの2割が小学校への入学もしておらず、なおかつ、入学してもドロップアウトが大変多い。理由は家庭が貧しいことによる。
現在、南アの多くの地域で授業料は払わなくてよいことになっている。(政府は授業料免除、そして教科書の支給を実施しつつある。)しかし、それでも黒人家庭にとって子どもを学校へ通わせることが経済的な負担である場合が多い。それは制服を用意しなくては通学できないからである。制服の廃止を提案したい。
3. 当然のことながら白人の子どもが通う学校は設備はよく、教育程度も高いが、黒人の子どもの通う学校は水道すらなく、教師もきちんとした資格をもたずに教えているところが多い。

暫定政府として今後の計画

教育の一本化を目指している。人種を問わず高校卒業まで義務教育とするという案もある。だがそれを実現するためには巨額の予算を必要とする。ざっと計算して3,500億円だという。南アの国家予算の41%を毎年使って15年かかる額である。暫定政府は外国からの援助に期待している。